



Profile — 飯田健夫

1965年、茨城大学心理学科卒業。
1986年、学術博士（筑波大学）。通産省工業技術院製品科学研究所、立命館大学理工学部教授、情報理工学部長を経て、2010年より現職。専門は人間工学。著書は、『感覚生理工学』（単著、コロナ社）、『感覚知覚心理学』（分担執筆、朝倉書店）など。

私の所属していた通産省の研究所では、ある在籍年数で留学の資格が与えられました。ところが私には海外の大学や研究者との交流経験などまったくなく、闇雲に押しかけレターを出そうかと思っていました。そのとき、国内留学でお世話になった大山正先生（当時千葉大学）から、ペンシルヴェニア州立大学（Pen State）のリーボヴィッツ（H. W. Leibowitz）先生をご紹介いただきました。

英会話の講習を数ヶ月受けただけで、Pen State がどこにあるのか、住むところも未定のまま1971年の夏に羽田を立ち、リーボヴィッツ先生のもとで1年間留学しました。ちょうど椎名健先生（現在文教大学）が大学院に留学されており、英会話能力抜群の椎名先生に公私共にお世話になりました。

当時、研究所では面積や空間把握における色彩の効果を研究課題としていましたが、心理手法に加え、より客観的に視覚効果を検証する手法を模索していました。

一方、リーボヴィッツ先生はそ

私の研究の原点となった留学

立命館副総長 立命館大学副学長

飯田健夫（いいだ たけお）

の頃、大学キャンパス内の並木道（俗称リーボヴィッツ並木）を使ったポンゾ錯視など奥行き知覚の研究を進めるとともに、レーザオプトメータを試作し、眼の調節系の変化を計測するという、新しい奥行き知覚の研究をはじめていました。

先生のオフィスで、しどろもどろの挨拶が終わるとすぐに実験室に案内され、組み立てられたレーザオプトメータの説明を受けました。暗室で装置の全容が見えない状況で、“laser speckle pattern” “resting point of accommodation” “night myopia” など私にとっては聞き慣れない単語が連発され、計測原理も実験目的もまったく理解できませんでした。先生が帰られた後、椎名先生の解説で概要を知り、これぞ求めている計測法ではないかと、思わずガッツポーズをしたのを覚えています。

リーボヴィッツ先生の研究室では、このレーザオプトメータを使って、視野の奥行き情報減少に伴う眼の調節応答の関係を調べていました。その一環として、私は人工瞳孔径をパラメータとした調節応答を計測することになりました。

網膜照度を一定にし、瞳孔径を縮小していくと、視標の提示距離にかかわらず調節系の応答がある値（調節安静位）に収束するという結果を出しました。先生からは「われわれの理論が再検証された」と褒めていただき、論文をJOSAに載せることができました。レーザオプトメータによる調節の計測は、回転ドラム上のできるス

ペクルパターンの動きを報告させることによって行われます。英語に弱い私はできるだけ日本人を集めたのですが、学生が成績のポイント稼ぎに来て「ナイヤガラの滝つぼの水煙のようだ」などと答えられ、暗室の中で記録する手が宙をさまようことも度々ありました。

日本に帰りこの装置を私なりに改良し、奥行き情報に対する眼の調節系の応答を計測し、学位論文としてまとめることができました。また調節計測がきっかけで生理学的計測領域にも入り込み、大学に移ってからは、工学の分野で感性や意志といった高次な情報を生理指標で計測する研究をはじめました。したがって、リーボヴィッツ先生に指導されたレーザオプトメータが、心理学から人間工学への、私の研究の大きなターニングポイントになりました。

研究以外にも、ボストンで開かれた心理学会で、演壇の前の床に座り込みコーラを飲みながらディスカッションしている参加者を見て、日本との違いに驚いたこと、アメリカンフットボールを初めて観戦し、興奮して立ち上がる巨漢の学生で、タッチダウンの場面はほとんど見られなかったこと、大学の記念トランプが“Printed in Japan”であったことなど、今でも40年前の出来事が鮮明に残っています。

最後に、今の私の研究の原点を教授していただいたリーボヴィッツ先生、その機会を与えてくださった大山先生、家族ごと面倒を見ていただいた椎名先生に心から感謝いたします。